

---

# 黒の魔術師

蝙蝠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の魔術師

### 【Nコード】

N8880J

### 【作者名】

蝙蝠

### 【あらすじ】

婚約者のいる天才魔術師の少女と過去ありな薬師の物語。

## プロローグ

その日、サクスリートの町の人々は華々しい活気に満ちていた。

というのも、この町の領主にしてリドネア王国公爵の地位を持つフィースト家の次期当主であるセレス

・フィーストの成人の儀式がおこなわれるのである。フィースト家は、最初の魔術師であるクレオ・フィーストの直系の血筋で、魔術師人口の多いこの町では、昔から敬われてきた存在だった。また、フィースト家の血を引くものは、大抵の場合魔術師としての才能があり、次期当主ともなればその魔力量、知識ともに最高ランクに位置した。

リドネア王国では、15歳で成人の儀式を行うのが習わしで、フィースト家ではそれに伴い生涯のパートナーになる使い魔の召喚の儀式を執り行うのが慣例だった。

現当主グレイスの使い魔は、聖獣といわれるユニコーンで、先代はフェニックスだった。中には、伝説と言われている天族を召喚したのももいたという噂だ。

そうゆう経歴もあり、グレイスの息子で、今日の主役でもあるセレス・フィーストへの期待は高まる一方だった。だれもが、セレス・フィーストも父や祖父と同じような聖獣か、もしかしたら天族を呼び出してしまうのではないかとドキドキしながら想像していた。

セレス・フィーストは、クレオの再来と呼ばれるほどの高い魔力を持ち、幼い頃から魔術師としての専門的な教育を受けてきた。だから、サクスリートの町の人々は以前からセレス・フィーストに大きな期待と尊敬の念を抱いていたのだ。

いよいよ成人の儀式が始まり、姿を現したセレス・フィーストに人々は感嘆の声を上げた。

白い肌に、整った顔、青い瞳に漆黒の長い髪、まだ幼さを残すセレ

ス・フィーストの姿は、女性らしさと、男性らしさの両方を兼ね備えていた。セレス・フィーストが透き通る声で儀式用の聖句を詠唱するると、サクスリートの町の人々は声変わり前の高く美しい声に魅了された。中には、神聖さと神々しさを併せ持つ、セレス・フィーストの姿を魔術で録画して永久保存しようとする人まで現れるしまつだった。

「我が名は、セレス・フィースト。始まりの魔術師、クレオ・フィーストの血を継ぐ者なり。我にしたがえし者よ。今こそここに姿を現せ……使い魔召喚！！！」

セレス・フィーストが魔法陣にその白い手をつくると、辺りは強烈な光に包まれた。

人々は、その光に目を眩ませながらも、次に起こるであろう聖なる生き物との対面を信じてうたがわなかった。

……だが、しかしその瞬間が訪れることはなかった。強烈な光のあと訪れたのは、影のような闇だった。サクスリートの町の人々は突然のことに混乱した。領主であるグレイスも不足の事態にあせっていたが、なんとか場を鎮めようと、必死になっていた。

そんな時、たまたま上空を見上げた男が、何かに気がついた。

この闇は、太陽が突然消滅したためでもなければ、天侯が急激に悪化したためでもなく、巨大な何かのせいで大きな影になっているのだということに……

しばし固まっていた男は、少しの間の後叫んだ。

「ば、化けものだ……！！！！！！！！」

その叫びを聞いた周囲の人々は、次々に上空を見上げた。

先ほどまで必死に場の鎮静化を図っていたグレイスも、思わず上を仰ぎ見た。

サクスリートの町を覆い隠すように出現した、巨大な生き物は、はるか下にいる人々を見てニヤリと醜悪な顔で笑った。

そして、鋭い牙の生えた口をガバリと開き、眼下の人々に向かって巨大な火の玉をいくつも投下した。

町はたちまち恐怖の悲鳴で満たされた。

その後この日は、黒の祝日と名付けられ、いつまでも消える事のない恐怖を町の人の心に植えつけた。

不運にも、恐ろしい怪物を呼び出してしまったセレス・フィーストは、黒の祝日から3日後に悪魔に魂を売った反逆者として処刑された。

## プロローグ（後書き）

駄文ですみません。

誤字脱字などありましたら、教えて下さると有難いです。

## 第1話<白髪の老人と少女魔術師>

レオナ・クロムエルは、一人ギルドに向かって歩いていく。すでに一刻程前から探し続けているのだが、一向に見つかる様子はない。

とはいえ、決してレオナが方向音痴な訳ではない。

原因は、この町の複雑すぎる道にあった。

いくつもの枝分かれする細道に、曲がり角・・・注意していなければ宿にも帰れなくなりそうだ。

しかも、極め付けに町の地図は大変大雑把で、おもな通りしか書かれていない。

何度も人に道を尋ねたが、それでも複雑すぎてよくわからないありさまだ。

今日はもう諦めて帰ろうかとも思ったが、レオナの通う魔法学校の課題で、ギルドのBクラスの依頼の中で自分に出来そうな物の一つを受けて、その経過をこと細かくレポートに書かなくてはならないのだ。

なんでも、実践を学生のうちに経験してほしいという学園側の考えのもとで、このような課題が出されるらしい・・・

本来ならば長い夏休みの間に行えばそれですむような課題だったのだが、レオナは他の用事で休みがほとんどつぶれてしまったため、レポートの提出期限まで後4日を切ってしまった。

主席であるレオナは、期限に間に合わないなどあってはならない。そのためには、一刻も早く依頼を受けささと終わらせなければならないのだ。

なのでレオナは、もう一度誰かに道を聞くことにした。

辺りを見回し、声をかけやすそうな人を探す。

すると、視界の片隅に腰のあたりまである白髪の老人の姿が見えた。こんな老人に道を聞いてもわからないだろうと目を逸らそうとしたその時、フラフラと歩いていた老人は若い男にぶつかられ思いっきり転んでしまった。

レオナは特別正義感が強い訳でもなかったが、さすがに見て見ぬふりをすることも出来ず、老人に駆け寄った。

なかなか起き上がる事の出来ない老人を助け起こすと、老人にぶつかっておいて謝りもしない男を睨みつけて、文句を言おうとしたが、その声は当の老人がレオナの服の裾を強く引っ張った事によって遮られた。

「何でよおじいさん！！ぶつかってきたのはあつちでしょう！！  
！おじいさんには反論する権利があるは！」

しかし老人は首を横に振るばかりだった。

髪と同じくらい長いひげで覆われた顔はまったく表情が見えないが、なんとなく悲しそうな雰囲気だったため、レオナは仕方なく引きさがることにして、立ち上がろうとする老人の手助けをするため、彼の手首をつかんだ。そして、その手首のあまりの細さに驚いた。ほとんど骨と皮だけのような異常な細さだったからだ。

立ち上がった老人は意外な事に、背が高く背筋もピンと伸びていたが、そのボロボロの服装から何日も食べ物をとれないほど貧しいのはあきらかだった。

レオナは、しばし迷った末、自分もまだ昼食をとっていない事を思い出し、ここで会ったのも何かの縁に違いないと、老人にも昼食を奢ってあげることにした。



「おじいさん？おなか減ってない？私お昼ご飯まだなんだけど、一緒に食べない？」

老人は一瞬ひどく驚いたような仕草をし、しばし考えるような間があった後、空腹には勝てなかったのか恐る恐るうなずいた。

レオナは、老人がうなずくを見ると、再び老人の細い手を取り、たまたま近くにあった食堂へと入っていった。

## 第1話<白髪の老人と少女魔術師>（後書き）

最後をまったく考えないで書き始めた小説なので、どこまで続くのかわかりませんが、完結目指してがんばります。  
今後、少しは面白い展開になるはずだと自分的には思っているので、よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8880j/>

---

黒の魔術師

2010年12月26日22時16分発行